阪神大震災の復興に関するモニュメント調査

学籍番号 12012009 番　古　澤　隆　広

第 1 章　序論
第 2 章　研究の背景の明示
　第 1 節　モニュメント調査の意味付け
　第 2 節　仮説と研究の方法
第 3 章　西宮市での実証
　第 1 節　実証の具体的方法
　第 2 節　西宮市の震災に関するモニュメントのデータ
第4章　　考察
さいごに

第 1 章　序論

3 回生のときに授業で阪神大震災を経験された方（当時神戸市にいた）のお話を聞く機会があった。私も中学生のときに大阪府堺市の実家で大きな揺れを感じたが、周りで死んだ人どころか、けが人も出なかったので当時はあまり実感がわかなかった。

実際に神戸市で阪神大震災を経験された方の話を聞いて、やはりすごい規模の震災だったことをあらためて思い知らされた。

今回卒業論文を執筆することになり、まず頭に思い浮かんだことが阪神大震災に関するテーマで書いてみたいということだった。正直、震災に関する専門知識もほとんど無く、本当に書けるのだろうか、と不安で眠れない夜をすごしたこともあった。

だからといって、何か他のテーマで書いてみたい、あるいは書く自信があるのかと考えてみてもこれといって適当なものが思い浮かばない状況だった。

そんな悶々としていたときに、授業でたまたま同じゼミに所属していた田中崇介くんが阪神大震災の追悼のイベントやモニュメントを調査してみたいという発言をして、ゼミの教授である立木茂雄先生が、強い興味を示してモニュメントの方で進めてみてはどうかということになったのだが、田中くんは一人でやるのは肉体的にも精神的にもつらいです、

と訴えた。教授も納得してもう 1 人と協力してやったらどうかと提案し、その時にまだテーマが決まっていなかった私が彼と協力することになった。

今回、阪神大震災に関連するモニュメントを調査することがなぜ重要なのかということを考えてみると、1 つは以前阪神大震災を経験された人達と接する機会があり、その時に強い関心がわいてきて、もっといろんな角度から阪神大震災を考察してみたいという個人的な欲望だと考えられる。阪神大震災をテーマにすると言っても規模が大きいので、もっと調査対象をしぼり込む必要があった。そこで田中君が興味を示していたモニュメントを対象にすることになった。調査対象は決まったものの、そのままでは範囲が広すぎる。また阪神大震災では 6,433 名も亡くなったので関連するモニュメントの数も膨大な数になると予想できる。

もう 1 つは時期的な問題である。来年の 1 月 17 日で阪神大震災からちょうど 10 周年を迎えるので、再びマスコミが阪神大震災をあつかう可能性が高いと思われるこの時期に、当時テレビや雑誌などで頻繁に目にした阪神大震災というものの実態に少しでも触れておくのが、タイミングとしては最高だということで。

第 2 章　研究の背景の明示

第 1 節　モニュメント調査の意味付け

そもそもモニュメントを調査することで何が分かり、どんなメリットがあるのか。正直に言うと、始める前は自分でもよくわからなかった。だが実際にモニュメントを調べて回り、そのモニュメントが建てられた場所・時期・死者数･モニュメントの形態などを一覧にして、それぞれのモニュメントが出来た経緯を細かく記述した文献は存在する。「モニュメントから見た雪崩災害」（和泉ほか　1995）には新潟県をはじめとする日本の豪雪地帯で発生した雪崩災害に関連するモニュメントの写真にそのモニュメントが出来るきっかけになった雪崩災害についての説明がくわえられている。

また、今井信雄（2001）によれば、阪神大震災のモニュメントには二つの形式が存在していた。ひとつは身近な人の死を追悼する型で、もうひとつが「わたしたち」という言葉が数多く見られた型である。つまり、阪神大震災のモニュメントといっても、できたきっかけや設立主体が違えば、そのモニュメントがもつ意味合いがかわってくるということである。これらの違いをひとつでも多く発見することができるのならば、モニュメントを調

査してみる価値はあるだろう。

さらにもうすぐ阪神大震災発生から 10 周年になるので、マスコミにとり上げられる機会も増えると予想される。そこで調査範囲を西宮市に限定した。なぜ西宮市を選んだのかという理由については、第 2 節で詳しく述べることにする。

またそのモニュメントが出来たきっかけになった事故や災害から得られる教訓を忘れないためにも、モニュメントの存在をデータベースに記録しておくことは有意義であると思われる（和泉ほか 1995）

第 2 節　仮説と研究の方法

そこで、どのような方法でアプローチしていくかが重要になってくる。立木先生の提案も考慮に入れながら実際に私たちがとった方法は、デジタルカメラ（GPS 付き）で西宮市にある阪神大震災に関するモニュメントを撮影していき、さらにそのモニュメントが出来た経緯を聞きだすというものだった。

モニュメントを撮影するのはデータとして残すためであり、西宮市の地理情報と照らし合わせて何か発見できるものがないかどうかを検証するためでもある。

なぜ西宮市なのかということには理由がある。阪神大震災では 6,433 人の死亡者が出たが、最も多いのが神戸市の 4,571 人である。2 番目に多く犠牲者を出したのが西宮市で 1,134 人が亡くなっている。今回、震災のモニュメントを調査の実行を決めたのは 9 月頃だった。卒業論文の提出期限は 12 月 24 日である。上の数字を見ても明らかなように神戸市の死亡者数は突出して多く、それに関するモニュメントの数もおそらく数え切れないほど存在しているに違いないと考えた。そして、これも重要なことだが神戸市の震災関連のモニュメントについての調査もおそらくかなりの人間がもうすでにおこなっていることが予想された。卒業論文を執筆するにあたり、他人がまだあまり扱っていない範囲を対象にしたいという願望と現実に時間的な制約が存在するということを考慮すると、兵庫県で 2 番目に多くの死亡者を出している西宮市のモニュメントを調査する方が適当であると判断した。

私たちの卒業論文の特徴として、立木茂雄教授の的確な助言と多大なる支援を受けていることがあげられると思われる。分かりやすい例で言うと、モニュメントを撮影するためのデジタルカメラ（GPS 付き）を 2 台購入していただいたことが挙げられる。

今回卒論を執筆するために GIS（Ｇｅｏｇｒａｐｈｉｋ　Ｉｎｆｏｍａｔｉｏｎ　Ｓｙｓｔｅｍ）というソフトを使用した。GIS とはコンピュータ上に地図情報やさまざまな付加

情報をもたせ、地理情報を視覚的に表示することの出来るシステムのことで、通常は土木などの科学的調査、土地や施設や道路などの地理情報の管理、および都市計画などに利用されている。今回卒業論文の執筆するにあたって立木教授が GIS の使用を強くすすめてくださったという経緯もあり、使わせていただくことにした。なお GIS を使用するときに必要な西宮市のデータは防災科学技術研究所 地震防災フロンティア研究センターから提供されたものを利用している。このデータには家屋の倒壊データや建築構造、死者情報、応急仮設住宅や避難所の位置など西宮市における被災情報、復興情報が含まれている。

GIS と西宮市のデータを用いてどんなことを検証していくかを考えたときに、最初に思いついたことは、死亡者が多い地域ほどその付近にモニュメントが多く建てられているのではないだろうか、という仮説だった。

この仮説は実に単純な理論から導き出されている。つまり、モニュメントが死者に対する慰霊碑的な役割を果たしているのではないか、という理論である。

この仮説の検証をおこなうために GIS を使ってバッファリングという空間解析をおこなうことにした。バッファリングとは地理空間上の特定の事物が周囲に影響を及ぼすゾーンを生成することをいう。まずモニュメントの影響を及ぼす範囲を半径 500M の円と設定した（実際には 250M の円と 500M の円の二つを生成）。これは、同じく結節機関であるといえる公園が、西宮市では都市公園法に従ってその誘致距離が「近隣公園」では 500M、「街区公園」では 250M に設定されていることや、同じく結節機関に数えられる医療機関において定められている「第一次診療圏」が 500M であることなどに準拠した。次に西宮市内の死亡者のデータと先ほどのモニュメントの影響を及ぼす範囲とを比較して、モニュメントのバッファ･ゾーンとの関連性を調べてみた。

結果としてやはり、死亡者が多い地域にモニュメントが建てられている場合が多かった。

しかし、死亡者が多く出ているにもかかわらず、モニュメントが作られていない地域も何箇所か発見された。

そこで私たちは、なぜこの地域にモニュメントが作られてこなかったのかを検証してみることにした。具体的には死亡者が多い地域であるにもかかわらず、近くにモニュメントがつくられていない地域をピックアップしてみた。そして実際にその地域を歩いてみてその地域の特徴を探ってみようとした。結果的にこの方法ではなぜモニュメントがつくられていないのか、ということはわからなかった。

次に考えたことは GIS に西宮市の地理情報を載せて、モニュメントの場所と死亡者･避難

所などの情報を照らし合わせてモニュメントの出来やすい場所に共通する特徴を発見するということだ。もし発見でいればモニュメントがつくられる理由が見えてくる可能性もある。震災を経験した人間がどういう心理でモニュメントをつくるのかがわかれば、そのモニュメントがその地域でどのような位置づけをされているのかがわかるかもしれない。そういう考えで今回の調査を実行してみた。

第 3 章　西宮市での実証

第 1 節　実証の具体的方法

ここでは実際に西宮市へ行ったときに訪れた場所についての簡単な記述を紹介する。まず、西宮市のモニュメントの場所については「希望の灯り ともして…」（震災モニュメントマップ制作委員会 2001）を参照した。また、上記の本で存在が確認されていないモニュメントを調査するために、小・中学校や神社や寺などで地元の住民にモニュメントの存在を知らないかを尋ねた。

実際にモニュメントがある場所を探し出して、デジタルカメラでモニュメントを撮影して学校ならば当時の状況に詳しい先生に、公園ならば近くを通りかかった人などからモニュメントが出来たいきさつを聞いて回るというものだった。その際に IC レコーダーを使用して会話を録音しておき、あとでテキスト化をした。場所によっては当時の様子を知っている人に出会うことができず、情報収集ができなかったところもある。その場合は「希望の灯り ともして…」（震災モニュメントマップ作成委員会 2001）の記述部分で補足してある。

学校の場合はいきなり行って勝手に入ろうとすると不審者と間違われかねないので、前もってうかがう約束を取り付けてから行くのだが、このなれない作業に最初の方はかなり精神的な疲れを感じていた。

学校以外には公園･神社･お寺･商店街･警察署･資料館･社会福祉施設などにあった。これらの場所は、事前にアポをとることが難しいので現地に直接出向いて、近くの人に話を聞くという方法でアプローチしていった。だが阪神大震災から 10 年近く経過していたので、なかなか当時の状況を詳しく知っている人はいなく思っていたほど成果は上がらなかった。

そこで話が聞けなかったり、聞けたけどほとんど何も知らなかったりした場合は本で調べた内容と組み合わせてみた。以下、モニュメントがあった場所についてのストーリーを

並べてみる。なお例外としてモニュメントがない地域の話も少しだけ混ざっているが、モニュメントに関係のある話が聞けたので載せておいた。

第 2 節　西宮市の震災に関するモニュメントのデータ

西宮震災記念碑公園　追悼之碑･写真パネル

９月 14 日に西宮震災記念碑公園に行った。ここが西宮市のモニュメントの中で 1 番最初に訪れた場所である。高さ 3 メートル、横 9.2 メートルの巨大な石碑である。この追悼の碑には震災で亡くなった西宮市民ら 1081 名の名前が刻まれている。

この西宮震災記念碑公園は震災から 3 年後の 1998 年 1 月 17 日に開園している。大きな石碑の周りには 8 個の小さな円筒碑が並んでいて、当時の状況の様子を撮影した写真などが貼り付けられている。

高木小学校　高木小の鐘

9 月 19 日

学校にあるモニュメントで最初に訪れた場所である。初めてだったので、アポもとらずにいきなり校門から侵入してしまったという、今となっては苦い思い出の学校である。

突然お邪魔したにもかかわらず、高木小学校の校長先生（もしくは教頭先生）にていねいに対応していただけた。

阪神大震災によって高木小学校の生徒が 5 人亡くなっている。ここにあるモニュメントは、復興の鐘という名前の通り 2･5 メートルのポールの左右に直径 30 センチメートルの鐘が付いたものだ。亡くなった 5 人の冥福を祈るとともに、子どもたちに震災に負けずに力強く生きて欲しいという思いが込められている。

ポールの先端にあるドッジボールほどの球体を覗き込むと、モニュメントの前方にいる人がその球体の中にまとまって見える。みんなで力をあわせて頑張ろうという思いも込められているらしい。

また毎年 1 月 17 日には、周辺住民が集まって追悼集会を開いているとのこと。そのときにだけ震災で亡くなった 5 人への呼びかけとして復興の鐘を 5 回だけ鳴らすことになっているそうだ。

熊野神社　再建鳥居

9 月 19 日

　この神社のモニュメントは入り口にある鳥居そのものだった。阪神大震災で熊野神社がある西宮市高木東町は建物のほとんどが全壊。熊野神社の鳥居も壊れてしまったらしい。神社内にある建物に住んでいる人に話を聞いたが、当時の状況はほとんど知らなかった。鳥居を修復するときに「平成 7 年 1 月 17 日　阪神･淡路大震災の為再建」という文字を柱に彫って記念碑的なものとして位置付けた。当時壊れてしまった鳥居の残骸は今も残されている。

西宮中央商店街の話

　阪神大震災で商店街の約 200 店の 7 割以上が全半壊し 2 人が亡くなった。再建後は後継者不足や不況の影響を受けて約 70 店まで減少したという。さらに駅内商業施設や大手スーパーの進出が相次ぎ、震災以前の町並みは消えてしまった。

　この地域のモニュメントは西宮中央商店街にある、震災直後から針が止まったままの大時計である。2003 年に震災で傷んだアーケードとともに撤去され、モニュメントになった。2004 年に街路に石畳や街灯を設置するなどして、ようやく震災からの復興のきっかけができてきた。

大社中学校の話

　この学校では 3 人の生徒が震災で亡くなっている。当時、体育館には 100 人ほど避難した。集まった義援金でつくられた石碑と花壇からなる「祈願園」が設置されている。花壇は縦 1 メートル、横 3 メートルの大きさである。震災被害を風化させない、という想いが込められている。1995 年の 6 月に学校の職員や生徒の手で除幕がおこなわれたそうだ。

甲子園警察署　石造り十三重の塔

　もともとは漁の安全や水害の被害からの鎮守を願ったもので、1952 年に地元の住民が警察に寄贈したものだった。阪神大震災後の混乱によって、植え込みの中に崩れたままの状態で忘れ去られていたが、8 年後の 2003 年の 4 月に甲子園警察署を訪れた人が石版を 2 枚発見したのをきっかけにして、残り 11 枚も見つかった。「このままではしのびない」ということで再建され、2003 年の 9 月に完成された。

素盞嗚神社　阪神大震災復興事業竣功之碑

阪神電鉄甲子園駅から南へ約 5 分歩いたところに小さな神社がある。この神社はプロ野球阪神タイガースの本拠地で高校野球の聖地でもある、阪神甲子園球場のすぐ近くにある。阪神大震災で地盤が傾きかわらもずれた。地域住民などからの寄付によって社務所などを建て替えることが出来た。感謝の気持ちを込めて、竣工した 2002 年 3 月に高さ約 1.6 メートルの石碑が建てられた。

福應神社　『阪神淡路大震災復興奉賛者芳名』の碑

阪神久寿川駅から南へ約 3 分。阪神大震災によって、福應神社の社務所と儀式殿が全壊した。この神社には御影石でつくられた「復興奉賛者芳名」の碑（縦 1 メートル、横 2 メートル）が建てられている。この石碑には復興に尽力した団体や個人の名前が刻まれている。1997 年に儀式殿跡地に安心コミュニティー施設が完成し、集会室を老人会などが利用しているという。

森具公園の話（自治会副会長さんの話）

4 年ほどしてから石碑が完成して公園開きがおこなわれた。来年が 10 周年なので今、公園にあるお地蔵さんの横に、慰霊碑を建てる予定である。今までは近くの住民で集まったりはしていない。公園は区画整理で出来た。公園以外の場所で集まることもない。震災から 5 年経って区画整理がやっと終わって、とりあえず一段落したので来年に何かやろうという意見がでてきた。このあたりで震災を経験された人は 6~7 割ぐらい。しかし、神戸市などで経験された人が多い。県外からくる人はまれ。

あまり当時のことを思い出したくないという人もいるので、大げさにやりたくはない。今ある石碑は西宮市がつくったもので自治会が管理しているだけ。来年作る慰霊碑は自治会が主体的につくるもの。

西宮市役所の話で森具公園につくる予定のモニュメントについての話が聞けた。それによると具体的には公園の外につくられるそうだ。公園の中だと宗教と絡むので宗教分離の原則から許可できないらしい。

阪神土建組合の話

当時、組合員が約 12,500 人いた。多くの組合員が犠牲になり、後世に何か残していこうということで慰霊碑をつくった。毎年１月１７日には個別で慰霊碑を参拝したりしているが、全体的な行事としてはおこなっていない。来年は１０周年なので、何かイベントをおこなう予定である。慰霊碑が出来たのは平成１４年のこと。最近になってようやくできたのは費用がかかるため。約 150 万円かかっているらしい。

当時の人が少ないので、組合として行事をおこなっても内輪だけになってしまうと予想されるため、個別にやっている。

大社小学校の話

何か形で残したいという意見がでて、当時の校長先生の教え子に石を扱っている人がいたのでつくってもらった。

費用は、当時全国からボランティアに来ていた人達対する感謝の気持ちから謝礼金を渡そうとしたが、受け取ってもらえなかった。とりあえず、大社小学校の校長先生に預けておいた。そのお金で石碑をつくった。

被災された人達の気持ちの中で、もうこんなことは二度と経験したくない、という思いとこれからも生きていかなくてはならない状況で震災のことを思い出したくない、という思いがある。

一年に一度震災のことを軽く触れる程度にしている。具体的には、避難訓練をおこなったり、当時の状況の話をしたりしている。

甲陵中学校の話

震災で無くなった人がいた。当時、創立５０周年も近かったこともあり、亡くなった方への追悼の念と創立５０周年を記念してブロンズ像をつくった。

１月１７日に一番近い全校集会のときや、総合学習の時間に、震災や自然災害に対する避難訓練をおこなったり、震災のときのビデオを見たり当時の話を聞いたりしている。

教師は当時の様子を鮮明に覚えているが、生徒は震災当時まだ幼かったので、あまり覚えていない。むしろ、生徒より教師の方が震災によるトラウマを抱えている場合が多い。

単に、震災のことを思い出すのではなく今後のために学習するという目的でおこなっている。当時も現在もこの学校にいるのは１人しかいない。

震災で、校舎の一部が破壊されてプレハブが建てられていた。ブロンズ像の男子と女子の生徒が平和の方向を指差している。当時の美術の先生がデザインを担当した。ブロンズ像はまともにつくればすごく高いが、まけてもらったらしい。

高木公園の話

この公園は最近出来たばかりで、公園ができるまでは畑があった。公園内にあるモニュメントが、阪神大震災がきっかけでつくられたのかどうかもわからない。

神明緑地の話

このモニュメントがある場所は、もともと家が建っていた。震災でおそらくここに住んでいた人が亡くなられて、この場所にモニュメントが建てられたのだと思う。

毎年 1 月 17 日に近所の方が集まって追悼集会のようなことをやっているというううわさを聞いたことがある。

真砂中学校の話

当時の PTA 会長の依頼で西宮市のデザイナーがかもめをイメージしてつくったというモニュメントは学校の中庭に建てられていた。

毎年 1 月 17 日には全校集会や詩の朗読や地域の人の話を聴いたりして、生徒に当時の様子を知ってもらおうとしている。

甲陽学院中学校の話

この学校のモニュメントは西校舎にかけられている古びた壁時計である。当時、正面玄関にかけられていた壁時計は阪神大震災発生数秒後の 5 時 47 分で止まったままの状態だ。甲陽学院高校の山内教諭の呼びかけで 2000 年 1 月 14 日にモニュメントとしてかけ直された。

甲陽学院中学校では震災で生徒が一人亡くなっている。山内教諭は「あの時を刻む」と題した文章を時計の横に掲げた。現在、西校舎の教室は校史資料室などになり、入学式などの行事で校舎内の行動へ渡る時に生徒はこの時計や掲示板を見上げる。また、モニュメントマップで知った市民も時々学校を訪れるという。

仁川地すべり資料館の話

震災の影響で、今地すべり資料館の建っている近くで地すべりが起きた。そのときに付近で 13 世帯･34 名の方が亡くなられた。資料館のすぐ横の空き地に石碑が建てられている。

1 月 17 日には地元の自治会やボタンティアの協力でコンサートを開催している。毎年おこなっているわけではなく、今までに 3 回開催した。来年の 10 年にもコンサートを開催する予定。

昌林寺の話

震災で建物の一部が損壊したので、檀家のみなさんの協力で記念碑を建てた。1 月 17 日にも特に何もおこなっていない。近所の方はよく寺を訪れて、手を合わせている。10 周年にあたる 2005 年の 1 月 17 日にも特に何も予定していない。

高木西町公園

今回唯一、自分の目で確認できなかったモニュメントである。住所を調べて、近くの住民に聞いて回ったが結局わからなかった。2002 年 1 月に区画整理がおこなわれたばかりだそうで、このあたりに住んでいる人は震災後に西宮市に引っ越してきた人の割合が高いような気がした。

樋ノ口小学校の話

この小学校では児童 5 人が亡くなっている。校庭の花壇にりんごの石のモニュメントがある。なくなった児童をしのび植樹された 5 本のりんごの木を生かし、台座にはりんごの花びらをあしらった。そこからステンレス製のパイプが柔らかな曲線を描いて伸び、ちょうちょうが飛ぶ様子を表現している。プレートの碑文にはこう書かれている。「明日やりたかったこともあったことでしょう。その年の目標もあったことでしょう。大きくなってからの夢もあったことでしょう。しかし、一瞬にしてそれはかなわぬこととなりました。5 人に成り替わって 5 枚のりんごの花びらを実らせてあげたい」

上ヶ原中学校の話

この中学校には阪神大震災のモニュメントとして時計塔と壁画がある。旧校舎は激しい揺れでほとんどが損壊してしまった。生徒に犠牲者が出なかったがその家族が 6 名亡くな

った。つらくても夢を持とう、つらいときだからこそ夢を忘れまい、という想いが込められている。景観に映える新校舎ができた 1997 年に相次いで完成した。

大手前大学の話

阪神大震災で、大手前大学の学生が 2 名亡くなった。1 月 17 日が卒業論文の提出日で 2 人とも下宿先で被災した。その悲しみを忘れないためにこの鎮魂碑がつくられた。

毎年 1 月 17 日に、校内放送で黙祷を呼びかけている。そのとき、学校に来ている学生はその場で黙祷をささげているらしい。また、鎮魂碑の前には花束などが置かれる。学園内には震災の記憶と切っても切れないものが数多くあり、学園全体がモニュメントのようなものかもしれない。

浜脇中学校の話

この中学校の校庭の片隅には 6 本のりんごの木が植えられている。阪神大震災で亡くなったこの学校の生徒 6 人を偲ぶためのものだ。木を植えたのは西宮リンゴ並木後援会。1995 年に発足して市内の小中学校・幼稚園の亡くなった子どもたちのために全国から届けられたりんごの苗木を 22 校に植えた。

震災後、各地で慰霊碑が建てられていく状況で「学校に子どもたちが手を合わせるような慰霊碑をつくるのはいかがなものか」という理由から躊躇していた学校側であったがこの活動は歓迎した。

西宮リンゴ並木後援会は 2000 年に解散したが、植樹活動はしないに広がり定着した。その数はなんと 800 本を越えるという。

夙川小学校の話

夙川小学校の運動場には石碑「心やすらかに」が建てられている。当時 4 年生だった姉と 1 年生だった弟。亡くなった二人の生徒と校区 55 人の犠牲者を弔う。高い山と低い山がこぶのようになっている。亡くなった妹と弟ようにも見えるそのデザインは図工担当教諭が担当した。

阪神大震災によって小学校の校区にある木造住宅の約 8 割が全半壊の被害にあい、後者は避難所になった。ピーク時で約 1200 名が寝起きを共にした。

後呂和裁学院の話

この伝統ある職業訓練学校の校舎から南に 15 メートルほど歩いたところにある駐車場のはしに慰霊碑が建っている。震災で校舎の近くに建っていた学校の寮が倒壊し、生徒 2 人が亡くなった。慰霊碑は震災の起きた 1995 年の 8 月につくられた。

毎年 1 月 17 日と 2 人の誕生日には全国各地から大勢の同級生が慰霊碑の前に集まってくるらしい。今も学院の後輩たちが交代で清掃し、花を絶やさないようにしている。

香櫨園小学校の話

西宮市立香櫨園小学校の体育館には 1961 年の第一回卒業生から現在まで学校を巣立っていった生徒の名前が年度ごとに銅版に刻まれている。阪神大震災が起きた 1995 年だけは卒業生の名前の横に「大震災に負けないで」の文字と震災で亡くなった 6 名の名前がある。6 人の名前の横には「ともに学びともに遊んだ香櫨園っ子　阪神大震災の犠牲となる」と刻まれている。毎年 1 月 17 日の前後には、学校で「震災を考える集会」が開かれている。

瓦木中学校の話

阪神大震災で 2 年生 2 人と 1 年生 1 人が亡くなった。いずれも女子生徒だった。彼たちの思い出を形に残そう、とモニュメントづくりの話が具体化した。着任したばかりの美術科の先生の知人で空間造形の専門家が三角形に 3 本のペン先が付いた校章からデザインを考案した。時計盤には震災の起きた 5 時 46 分を示す場所が記されている。

津門小学校の話

学校の北門を入って右手に植えられている 2 本のくすのきの木陰に記念碑が建てられている。表側には「1995 年 1 月 17 日　阪神淡路大震災　記念碑」と記されている。町の再建がひと段落着いた 1997 年の夏ごろに、西宮市津門社会福祉協議会が回覧板で募金を呼びかけた結果 11 月に完成したという経緯がある。

校長の話によると毎年ではないが全校集会などで当時のことを生徒に話す機会をもうけているとのこと。

かぶとやま荘の話

西宮市社会福祉センターかぶとやま荘の玄関脇に「阪神大震災復興記念碑」が建てられ

たのは 1997 年 12 月のこと。記念碑の除幕式には西宮市老人クラブ連合会と共同で記念碑を建てた秋田県老人クラブ連合会のメンバーが参加した。

きっかけは以前から交流のあった秋田県老人クラブ連合会が阪神大震災の惨状を聞いて、他県の老人クラブの有志とともに西宮市を訪れたことだった。それ以降、西宮市と秋田県の老人クラブ連合会同士の交流が活発になり、秋田県側が記念碑の建立を提案した。西宮市老人クラブ連合会の約 300 人の犠牲者を追悼するという想いと、秋田･西宮の友情の絆を記念してある。

秋田県老人クラブ連合会の当時の事務局長の「活動を振り返る碑であり、明日への希望の碑であり、両県市のシンボルの碑です」という言葉からは過去を忘れないという想いと同時に、未来への希望が感じられる。やはり未来へ進むためには、一度区切りが必要なのかなあ、と思わされる気がした。

石井さんの話

山手幹線のところは純粋にもめたと思う。さいふく、神明、芦原などはいわゆる被差別部落で在日朝鮮人などが多く住んでいた。たとえば芦屋の清涼小学校の地区は壊滅度合いが高かった。低所得層の方のほうがたくさん亡くなっている。

小学校とか中学校とか公民館とかは軒並み避難所になっていた。今、モニュメントが建っていない場所はもめていたことが多かった。きちんとご飯が食べられた避難所とそうでない所があった。当時もめていたところはモニュメントが建てられていることが多いと思う。

仮設住宅がどこに建っていたかも重要かもしれない。仮設住宅が撤去されるまではモニュメントは建てられないと思う。仮設住宅と避難所と住民自治力という要素は関連があるかもしれない。避難所は最大で 130 箇所ぐらいになった。学校だけでなく寺なども避難所として利用された。

平木小学校･平木中学校はよくもめていた。山手幹線の工事をするときはかなり地元の住民ともめていた。教育委員会と市役所は仲が良くない。

仮設住宅は個人の地主が税金対策のために建てたケースもあった。土地の所有者が誰かがわかれば、どういう所有者がいるところにモニュメントがつくられる傾向があるのかがわかるかもしれない。たとえば公園にあるモニュメントでも誰が管理しているかによってできた経緯が違うかもしれない。学校でモニュメントをつくるということになれば教育委

員会も反対することはないと思う。

仮設住宅が建っていた公園にはモニュメントがつくられていない場合が多いかもしれない。仮設住宅が全部撤去されたのは 1999 年なので、それ以降につくられることが多かったと思う。住民が元住んでいた場所に帰ってこなければ区切りを必要としないからモニュメントをつくる必要がないかもしれない。

土地の持ち主と時期を調べれば何かわかるかもしれない。夙川公園は市が管理していると思う。神明町は確かに家がたくさん破壊されていた。中央体育館は避難所としての規模が別格だった。

学校･公園･神社などは公共空間だから住民の合意形成を得やすいだろうからモニュメントがつくられやすいということが言えるかもしれない。コーディネーターがいるかいないかが復興度合いに大きく影響してくる。持続可能なコミュニティーづくりには、コーディネーターの存在ともめる力が必要。

社会福祉協議会が運営に自信を持っている地域が 5 箇所あった。民生委員が積極的に動いて復興がさかんな地域とそうでない地域がある。5 つのうち 3 つぐらいの要素が重なったらモニュメントがつくられているという結果が導き出せればわかりやすいと思う。

西宮市役所の話

また 12 月 13 日に西宮市役所に行って、道路建設課の方に話をうかがった。その方の話によると山手幹線付近の住民とはそれほどもめたという認識ではないということだった。最初の方は少しもめたが、工事に着手しだしたらむしろこうして欲しい、という風にいろいろな要望を出してきたりする協力的な住民が多かったらしい。

さらに山手幹線には歩道の横にポケットパークをつくったり、公園に井戸をつくったりして震災からの復興を意識したく風が凝らされていることを強調されていた。慰霊碑や銅像などのように分かりやすい形ではないが、こういうものもモニュメント的な存在と言えるかもしれない。そう考えるとモニュメントそのものの定義があやふやになってきてしまうが、震災を経験した人がある程度復興してある種の区切りをつけるためにつくるものは全てモニュメントといえるのかもしれない。

GIS で震災死亡者とモニュメントの位置のデータをブッファさせてみて、モニュメントがつくられてもおかしくないと考えられる場所、つまり震災で人が亡くなっているのに追

悼のモニュメントがつくられていない場所がおおざっぱに見て 3 ヶ所あった。そのうちのひとつである青木町にある酒屋のご主人にうかがった話である。

竹中酒店の話

　別に人が死んだからといってモニュメントをつくらなければならないということではないと思う。西宮市震災記念碑公園のモニュメントがあれば十分だろう。

　モニュメントがある位置を見てみると、住宅があまり無い場所、邪魔にならないところに多い気がする。

　青木町は震災以降、それまで住んでいた人が流出して戻ってこないことが多い。そうした状況なので、経済的に立ち直れてない人が多い。商売をしているものから言うと、モニュメントをつくるところまで気が回らない状態だと思う。

　地域の団結力はない。町の特徴はのんびりしていると思う。大阪と神戸の間に位置しているので、どこかボーっとしている気がする。西宮市全体で見てもそういうとこがあると思う。

　竹中酒店のご主人の話からはこの地域にモニュメントが無いはっきりした理由を発見することはできなかった。しかしぼんやりとわかってきたことは完全な経済的復興をまだ果たしていない人が多く、震災についての区切りをまだつけられていないのではないか、ということだ。

　他の地域のモニュメントはある程度復興が完成して震災について区切りをつけるためにつくられているものが多かったような気がする。その点で言えば、青木町はまだ復興感が低く、震災に対しての区切りをつけられない人が多いということかもしれない。

次はモニュメントがあるべき場所であるのにもかかわらず、モニュメントがつくられていなかった地域のひとつである能登町についての話である。この地域にはりんご公園という狭いスペースが存在することを発見して、この場所について地元の人と西宮市役所の人から話を聞いた。

地元の人の話

　震災後の区画整理であの場所だけ買い手が見つからなかった。そこで、市が買い取って

管理しているという話を聞いたことがあるそうだ。

西宮市役所の話

阪神大震災で西宮市は 1146 名の方が亡くなった。1995 年に「りんご並木後援会」という団体が発足している。この団体の目的は全国からりんごの樹を寄付してもらい、亡くなった人の数と同じ 1146 本植樹することだったらしい。２０００年に約 800 本の植樹を終え、解散し今はボランティア団体が管理･運営をおこなっているとのこと。

りんご公園がある土地を整備したのは西宮市で土地の所有者もおそらくは西宮市とのこと。りんご公園が開かれたのは 1999 年の 9 月 9 日である。

第 4 章　考察

西宮市の阪神大震災に関するモニュメントは「希望の灯り　ともして・・・」（震災モニュメントマップ制作委員会 2001）や「思い刻んで　震災 10 年のモニュメント」（NPO 法人阪神淡路大震災 1.17 希望の灯り　毎日新聞震災取材班　2004）にモニュメントとして掲載されているものを中心に調査した。その内訳は小学校 6･中学校 7･公園 3･神社 4･寺 1･警察署 1･商店街 1･大学 1･専門学校 1･社会福祉施設 1･労働組合 1･資料館１･緑地１であった。

小学校･中学校のモニュメントの多さが目立つ。やはり生徒が亡くなったところではモニュメントをつくろうという意見がでやすいのだろう。西宮市役所の人も学校は公共の場であるし、モニュメントをつくりたいという申請が出されたら基本的に断ることはないと言っていた。だが、学校以外にモニュメントをつくりたいという申請があっても断ることが多いそうだ。たとえば公園の場合は、宗教分離の原則から行政としての立場を考慮しているらしい。モニュメントの性質上、公共の場所につくることが多くなる。公共の場所にモニュメントをつくる際には行政の許可が必要になるというわけである。

こういう理由でモニュメントをつくりたくてもつくることが出来なかったというケースもあったに違いない。

西宮市のモニュメントの調査をひととおり終えてみて特に印象に残っているもモニュメントについていくつか考察してみる。

石井さんの話では山手幹線の拡幅工事によって、地元住民と西宮市との間で争いが絶え

ずモニュメントをつくるどころではなかったのではないだろうか、ということだった。ところが西宮市の話では、確かに最初のほうは少しだけもめたが工事の着工が決まってからは地元住民も非常に協力的であったらしい。お互いの立場が異なるので断定するのは難しいが、行政側も認めているように多少の争いがあったというのは間違いないようだ。その争いが具体的にどの程度のものなのかがはっきりしない以上、拡幅工事による地元住民と西宮市との争いが原因でモニュメントをつくる余裕がなかったと言い切ることは不可能に思える。

西宮市のモニュメントを調査して感じたことは人によってモニュメントの定義が違うのではないだろうか、ということだった。自分の中ではモニュメントとは記念碑･慰霊碑･石碑などで、見ただけでモニュメントだとわかるようなものを意味していた。しかし、話を聞けた人のなかには「このまち全体がモニュメントみたいなもの」とか「この店がモニュメントだよ」と言っていた人がいた。自分たちが震災からある程度復興を成し遂げたという実感があるからそういう発言が出たのだろう。また、当事者としてはモニュメントにこだわる私たちが奇妙に映っていたかもしれない。

もうひとつ気が付いたことは阪神大震災から10年近くが経過している状況で震災のことを忘れたくない、という想いともう震災のことを思い出すのはいやだ、という想いの両方あるということだ。しかも人によっては両方の想いを同時に抱いて、その葛藤に苦悩していた。もちろん身内や知り合いが亡くなっているかどうかということは大きいだろう。そうしたことを考慮すると、現在でも震災の捉え方は人によって異なるものだということがわかる。

調査をはじめるまでモニュメントとは震災のことを忘れないため、つまり過去のことを忘れないためにつくられているのだと思い込んでいた。しかし実際にモニュメントを見て、人の話を聞いていくうちにもうひとつの役割を発見できた。それは未来へ進むための区切りとしての役割である。モニュメントをつくることによって、もう阪神大震災からの復興は終わったのだから新しい未来へと進もうという気持ちになれる。当然、地域によってはまだ経済的な復興が完全ではないところもあり、そういう場所ではモニュメントがつくられていなかった。

調査を終えてみて、反省する点としてはモニュメントの定義があいまいだということがあげられる。西宮市の道路建設課の人の話では、山手幹線をつくるときに地元住民からいろいろな意見が出されて、ポケットパークや井戸つきの公園ができたということだった。

見る人によれば阪神大震災をきっかけにしてつくられたものはモニュメント的な役割を果たしていると言えるだろう。また、熊野神社のモニュメントは鳥居が震災で倒壊したので新しい鳥居をつくるときに阪神大震災という文字を刻んだだけのものであった。先ほどのポケットパークや井戸つきの公園がモニュメントとしては認識されていないのに対して、熊野神社の鳥居がモニュメントとして扱われているのはどうもあいまいである。はっきりした基準があればモニュメントかどうかの判定も簡単におこなえるのだろうが、現時点でそういった基準を設定することは非常に困難な作業だと感じた。

結果として、モニュメントができる要素を絞りきることはできなかった。断定はできないが調査をしてわかったことは、やはりモニュメントは死者が多く出た地域につくられていることが多いということだ。あくまでも今回の短期間での調査を終えて、一番わかりやすかったことに過ぎないので断定は避けておく。おそらく、他にもいろいろな要素が組み合わさってモニュメントがつくられたのだと思う。たとえば経済的発展の進捗状況・地域のまとまり・地理的な条件・当時の被害状況などが考えられる。

西宮市がモニュメントとして認めているのは西宮震災記念碑公園のモニュメントだけである。それ以外のものは、モニュメントがある地域の人たちが阪神大震災とどう向き合うかということを重要視している。世間一般に阪神大震災のモニュメントであるということを認めて欲しいなどとは思っていないはずである。そういう状況で赤の他人である私たちが「これは阪神大震災のモニュメントですよね」という質問をしたところで、どこまで心を開いて話してくださる人がいたのか、という疑問もある。

調査をしていて時間的な問題も感じることが多かった。学校の関係者にモニュメントについて話を聞こうとしても約 10 年経過しているので、当時その学校にいた先生はほぼ全員がほかの学校に移っていたりしていなかった。校長先生・教頭先生クラスになると当時の様子を伝え聞いて少しは知っている方が多かった。それでも、詳しいことは把握していないという場合がほとんどであった。調査を始める前から少しは予想していたが、まさかこれほど当時のことを知っている先生がいないとは思わなかった。最初からこの状況を把握していればもう少し妥当な方法が見つかっていたかもしれない。自分たちの想像力不足を反省したい。

さいごに

3 回生のときに授業で阪神大震災を神戸市で体験された人たちの話を聞く機会があった。そのときはただ漠然と震災の影響のすごさを感じていただけだった。卒業論文で何をテーマにしようかと考えたときに震災も候補にはあがっていた。だが学生が 1 人で挑むには規模が大きすぎるのではないかという気持ちがあったので初めの頃は見て見ぬ振りをしていたように思う。たまたま同じゼミに阪神大震災関連のテーマに関心をもっていた田中崇介君がいたので、ぼくがそれに協力する形で今回の卒論が実現した。話したことはあったが特別仲が良かったわけではなかったので一緒にやることに不安を感じていなかったといえばうそになる。だが彼は、パソコンの知識が豊富で GIS を使用するときに無類の強さを発揮してくれた。そのほかにもいろいろ細かい作業をまかせっきりにしたことも多かった。とても私一人では出来なかったと思う。心から感謝したい。またご指導いただいた立木茂雄先生や TA の越智裕子さんにも心から感謝したい。

卒業論文を書くということがすごく負担になっていたが、やり終えてみて大きな充実感を感じている。学生生活を締めくくるのにふさわしい大仕事だったと思う。これから社会に出て苦しいもあるだろう。そんなときは卒業論文を書いたときのことを思い出して頑張れそうな気がする。

参考文献

今井祝雄、2004、『未完のモニュメント：まちのアートは誰のもの？』星雲社

今井信雄、2001、「死と近代と記念行為」『社会学評論』51(4): 412-429

大野道邦・林大造・野中亮、1997、「集合的記憶と個人的記憶――伊勢湾台風をめぐって」『奈良女子大学社会学論集』4

震災モニュメントマップ作成委員会・毎日新聞震災取材班編、2000、『希望の灯り ともして…』

震災モニュメントめぐり作成実行委員会・神戸市立飛松中学校 57 回生生徒・職員編、2000、『震災モニュメントめぐり：総合的な学習の記録』

鈴木博之、1996、『見える都市/見えない都市：まちづくり・建築・モニュメント』岩波書店

鳥越皓之編、1999、『講座人間と環境 4 景観の構造 民俗学からのアプローチ』昭和堂

三木英編、1999、『復興と宗教――震災後の人と社会を癒すもの』東方出版

森栗茂一、1998、『しあわせの都市はありますか 震災神戸と都市民俗学』鹿砦社